

コミュニケーションの原点を探る

——言語以前の行動伝承「あかんべー」を使って——

小林 照子

1. はじめに

言語習得以前の子どもと向き合った時、私はどうやって呼びかけ、語りかけているのか考えてみた。名前を呼んでみたり、ばあーと声を出してみたり、タンタンと舌を鳴らししてみたり。幼な子の気をひこうとして、表情や音声に工夫をこらす。幼な子に反応が見られると大喜びで繰り返す。工夫をこらすといっても、一番多いのは「ばあ」ということになるだろう。1967年に誕生した、あかちゃん絵本『いないいないばあ』が日本で一番売れている絵本として出版され続けているのも自然なことである。「ばあ」に反応が得られた時こそ、コミュニケーションが生まれる瞬間であり、そこには、気のぶつかり合いが生じていると言える。

小学生に向かって「ばあ」はないが、1年生の言語活動にかかわる授業を計画する際、他の学年以上に、気と気のぶつかり合い、無

意識につき動かされるエネルギーを大事に考えたいと思う。一般的にコミュニケーション能力の育成というと、「話し上手、聞き上手になるための技能習得」をめあてにした授業を考えることが多いが、私共は、そういった技能ではなく、技能を繰る子どもそのものの意識を耕すところに焦点を絞りたいと考えた。

2. なぜあかんべーなのか

生前、上原先生が言われたこと。

——音声言語の基本条件を考える時に、人間関係における対応が、「あかんべー」の一言に尽くされる。要点として、その一声が問題である。だから、その一声のときに表情が出る。その表情のときに、その姿態が問題であること。その姿態が場面と対応しているということ。——

今回、1年生の「構え」の授業として、

「あかんべー」を取り上げたのは、コミュニケーションの原点が、見い出せると確信したからである。子どもが一つの状況に追い込まれた時に、説明を越えて、体が反応し、体と声と表情が一つになって相手に発するものが、「あかんべー」である。「あかんべー」とは赤目のことで、おおむね拒否の意味があるというが、子ども達は「あかんべー」という言葉の意味を理解している訳ではない。子ども達の感情が無意識に反応しているのだし、五感、生理感覚が反応しているとも考えられる。この感覚は、一個人のものではなく、何かとてつもない永い年月の中で培われて来たもののような気がする。それは、意識して、考えた上での反応・行動というよりも、今ある、相手と自分との関係を立ち切ろうとする、あるいは作ろうとする生の心象表現ということになるだろう。

「あかんべー」をする時、子ども達は、その音声とその姿態の照合を楽しんでいるよう

にも見える。言葉の意味を介在させずに直接反応として相手に通じ、相手との関係を動かすことができるのだから、面白くないはずはない。「人間の思考基盤は、知識の知恵ではなく、感覚の知恵である。」という上原先生の言葉が浮んでくる。

3. 授業作りにあたって

「あかんべー」には、言葉としての明確な概念がない。言葉以前の生の心象表現だといってもよい。そこには概念で思考する前の、感覚の知恵がある。子ども達は、与えられた知識や概念などとは全く無関係に「あかんべー」をしている。1年生なら、どの子ども一度は「あかんべー」をしているであろう。そして、その定義や意味づけはできなくても、「あかんべー」を発する状況や相手を心得ているし、その場の雰囲気や、相手の反応も知っていると思う。

1年生の子ども達が「あかんべー」を発する際の心象を予想してみた。「呼びかける」「からかう」「はぐらかす」「居直る」「すねる」「拒否する」「意地悪をする」「逃避する」など。

今回の授業では、子ども達が「あかんべー」を発する場面を尋ねつつ、2枚組みの絵や、4コマ漫画を用いて、子ども達の心象を確かめたい。授業者が、子ども達の「あか

んべー」をどう認識するかという点については以下の5点を掲げる。

- ① 対人関係における対応がこの一声に尽くされているか。
- ② この一声に込められている心象を、子ども達がどう把握しているか。
- ③ この一声と表情が一体であるか。
- ④ この一声と表情に姿態が伴っているか。
- ⑤ この一声と表情と姿態は場面にどう対応しているか。

子ども達が発する「あかんべー」それぞれについて、この5点を確認する。そして、「あかんべー」を発した瞬間の対人関係の把握の違いに注目したい。それぞれの子どもに見られた「場面と姿態の統合」の違いに、「構え」の発達の実態が見られることを、期待している。「あかんべー」の授業をするこ

とにより、子ども達は対人関係の中で、人と人との「間」、すなわち人間（じんかん）を意識することになる。今までは、無意識世界から湧き上がってきた「あかんべー」を、意識化させることを、コミュニケーション能力育成の出发点として、授業を計画した。

4. 子ども達の反応（授業記録より）

「あかんべーを引き出す」

泣いた顔をひっくり返すと笑い顔になる、

うちわを使いながら、子ども達の「あかんべー」を引き出そうとした。目の前の相手の感情に働きかけるという場面を共有するまでは、手さぐりの時間が必要だった。

としお 赤ちゃんです。
T 赤ちゃんはどうしてる？

C 多数 泣いてる。

T にこにこしてもらいたいんです。

のん 泣かんでーって言う。

T じゃあ、やってみて。

のん 泣かんでー。（うちわに描かれた泣き顔に向かって。）
T （うちわを、ひっくり返して、笑い顔を出す。）

T 他には？
T 泣かんでよー。

まき もう泣かないでね。早く泣きやまして。

T はい、じゃあ、今度はね。赤ちゃんを泣かすためにはどうする？

としお いじめる。

T 他にどうする？

C けんかする。

C つねつちやう。

T つねつちやうたらかわいそうだね。他には？

のん お兄ちゃんがね、赤ちゃんのガラガラを取った。

C けんかする。

T 赤ちゃんはけんかできないよね。他にはどんなことをしたら泣くでしょう。りゅう注射する。

T 注射ね。触らないで泣かせるにはどうする？じゃあね。先生がにらめっこしたら泣いちゃったの。どうしてでしょう。

のん 怖かったから。

T この顔じゃ、怖くないでしょう？どんな顔だったら怖い？

れい (前に出て、上目使いでにらみ、怖い顔をしてみせる。)

C多数 怖くないい。

T じゃあ、もうちよつと怖い顔ってどんな顔？

としお (目を少し横にずらしてにらむ。)

C多数 怖くないい。

T 先生はね。手とか使いました。

C (両手を使い、口を左右に広げて怖い顔をする。)

こうき (指で両方の目尻を引っ張って怖い顔をする)

みほ (両目の下まぶたを指で引き下げ、赤目を出す顔をする)

T ありがとう。声も出してみて。

C ベーとか。

みほ ベーっ。

T もっと怖い顔は？何か出してもいいよ。

としお (両手の人差し指で目をつり上げ、親指で口の左右を下げ、歯を出した顔をする。)

T 歯が出たね。

かよ (両手の指先をそろえて、下まぶたを引き下げ、白目をむいた顔をする)

C あっ白目だあ。

C多数 おばけみたい。

T 歯の他に何か出ますか？

C ベロ。

C つの。

こうき (先にとしおがやった顔をして、口からベロリと舌を出す。)

みほ (両手の指先で、両方のほっぺたをつまんで前を見る。)

T ほっぺが出たね。赤目が出て、舌まで出すのを何んて言うか知ってる？

C うらめしやー。

T (舌と、指で赤目を出す絵を描き) これなんて言うか知ってる？

C あっかんべー。

T よく知ってるね。びっくり。あかんべ？あっかんべ？どっち？

C全員 あっかんべー。

T 今日の勉強はあっかんべーです。

あっかんべーをする時、身体はどうなりますか？ちよつとやつてもらおうかな？

C多数 いいよー。

T みんな立って。

C一同 (後列の女子5名の他は全員立つ。のんは、Tの呼びかけで、すぐに立ったが、隣の数人が立ち上がらないのを見て、座ってしまった。)

T セーの。

C一同 あっかんべー。(立ち上がった子ども達は、それぞれが、あっかんべーをする。舌を出さない子もいた。)

T 今度は、後ろの先生達に見せてあげて。セーの。

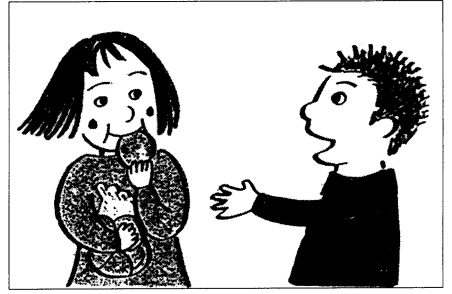
C一同 あっかんべー。

言語以前の生の「あかんべー」を引き出すには予想通り時間がかかった。言葉を知らない赤ちゃんに向き合うという設定にも難しさはあった。泣いている赤ちゃんを笑わせるという設定では、動かなかった構えが、笑っている赤ちゃんを泣かせるという設定で、動き出し、あかんべーの世界に入ることができた。

〈あかんべーの違いに気付く〉

子ども達に「あかんべー」の体感も体験もあることを確認してからは、2枚組の絵を使い、「あかんべー」を実演する活動に入った。

T じゃあ次は、この漫画を見て下さい。第1弾。この子なんて言ってるの？



絵 1

C おかしちようだいって。

T こっちの人は？

C ダメーって。

C あっかんべーって

T 前に出てやってよ。(女の子の絵を指して)「おかしおいしいなあ。」

C 一同 ちよつとちようだい。

C こうき あっかんべー。

(続いて、なお、みほも、代わる代る前に出て、「あっかんべー」をする。そのたびに、子ども達は笑い声を上げて反応した。)

T では、今やってみらった「あっかんべー」をビデオで見てみましょう

(今の実演を録画した「あかんべー」の映像を3人分、次々に観る。子どもたちは身体をよせ合ったり、手をつないだり、声をあげて笑った。)



絵 2

T 3人のあかんべーを比べてみよう。だれのが上手だった？

C なおさん。

T どこが上手だった？

C 悪者みたいだった。

T 怖かった？

C だれのも怖くなかった。

T 先生はこうき君のが怖かった。みんなは、やだーって言う代わりに、「あっかんべー」って言ってくれたんだよね。それでは、2枚目の絵を見せるね。みんなのと比べて、どっちが怖かったかな？

C なおさん。

C 絵の方が怖い。

T 今のは、いやだ、のあかんべーだったね。では、次いくよ。第2弾。赤い洋服の子は何言ってるのかな？

C 野球よして。

C (入れてという方言)

T 黄色い洋服の子は？

C ダメ。

C チビだからダメ。

T 赤い洋服の男の子はどうしたかな？

C あっかんべー。

T やってみてくれる？

(女の子を指名したが、恥ずかしがってやろうとしない。座ったまま、声は出さずに、右人差し指で赤目を出し、舌を出す「あかんべー」をする。)

(すると、座っている子ども3人が座ったまま次々に声を出して「あかんべー」をする。)

T 前に出てやってみようか。

T こうき あっかんべー

T こうきくんどんな気持ちであっかんべーしたの？

C こうき やな感じ。

C としお やな感じ。

T どうして？

C としお 入れてもらえないから？

T みほちゃんやってみる？

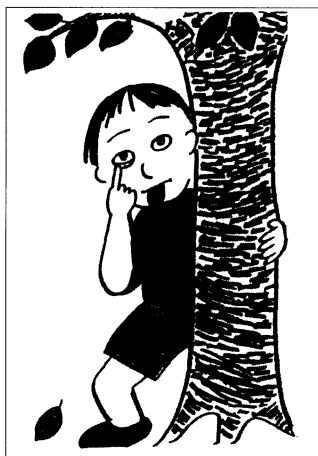
C みほ (さつと立ち上がり、前に出て) あっかんべー。

T これは、野球入れてもらえなくて、やな気持ちあっかんべーだね。赤い洋服の子はどこで、あかんべーしたのかな？

としお 追いかけていつてあっかんべー。
T では、絵を見せるね。



絵 3



絵 4

としお かくれてあっかんべー。
T どうして？
C こわかったから。
T なるほど。
C なぐられたらやだから。
T みほ けんかした。
T 第1弾と第2弾を比べてください。これは、同じあっかんべーかな？

C いや、目が違う。
C 向きが違う。目玉の向きが違う。
T なるほどね。そこまで考えてなかったなあ。

のん こっちはね、(第1弾を指して) 赤目がいっぱい出てる。そっちは(第2弾を指して) ちよっとしか出てない。

T なんでそうなっているんだろう。

C 引っ張りすぎてる。

T そう。こっちは、あっかんべーの勢いが良いんだよね。

としお (おかしの) 袋も上に上げてる。

T ここを見て (第1弾を指して) や

だあ。あっかんべー

C やだあ。あっかんべー

(TとCは、ほぼ同時に言う。)

T この人何者？「あかんべー」をして
いる子の絵を指して。)

C 多数 悪者。

T 悪者のあっかんべーだから力も強いのか。こっちは(第2弾) どっちが悪者？

C 大きい子。

T 「よせて」と言ったのにダメと言った
大きい子達が悪者だね。

C くやしかった。

T 悔しいあっかんべー。ではこっちは何

C あっかんべーかな。

C あげないあっかんべー。

T 第1弾は「おかしあげないよ。」って
する悪者があっかんべーをしているね。
第2弾は、「入れてあげない」と言っている
悪者に対して「あっかんべー」をしている。
このまま帰っちゃうのくやしいうから
ね。みほちゃんが言ってくれたんだよね。
けんかしてあっかんべーしているって。
第1弾と第2弾の違い分かったかな。

全員で立ち上がり(座ったままの子もいた
が)先生方と参観者に向かって「あっかん
べー」をしてから、子ども達の表情がやわら
かくなった。「あかんべー」が発生する絵を
見ると第1弾でも第2弾でも第一声は「ダ
メー」という言葉だったが、一度「あかん
べー」を発した後は、前に出ても、座った
ままでも、「あかんべー」を連発するようにな
った。

2枚組の絵を使う前に、「あかんべー」を
したことがあるかと聞いたところ、「やった」
「やったことがある」と声も手も挙がった。
先生方と参観者に向かってやるときに、座っ
たままで、「あかんべー」を発しなかった女
の子も手を挙げた。

子ども達がさかんに言ってくれたのは、兄
弟姉妹のけんか、友だちとのけんかだった。
「弟がイーダをしてきたから、お返しであか
んべーをした。」「友だちにむかむかしてあか

んべーをした。」と、日常生活の中で感情がぶつかり合う体験が話題になったところで、子ども達は活発に話すようになった。教師が「なんでむかむかするの?」と聞くと、「それは、いろいろあるけん。」という答えが返ってきた。

ここまでで、「あかんべー」には、①拒否、②居直り、すねる、の違いがあることを、認知することができた。しかし、言葉のない絵の中に登場する人物の関係を会話に置き換えて「あかんべー」を発するようにしたところには課題が残った。細かい描写で描かれた人物の表情、身体の大きさ、白目や赤目の大きさなどに敏感に反応した様子から、子ども達は「あかんべー」の呪術性を感じていたのではないかと思っている。

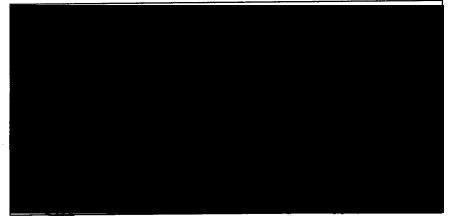
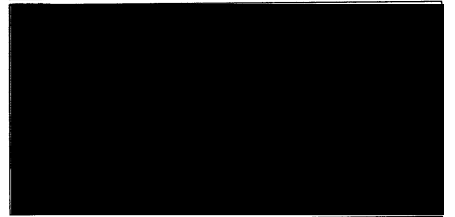
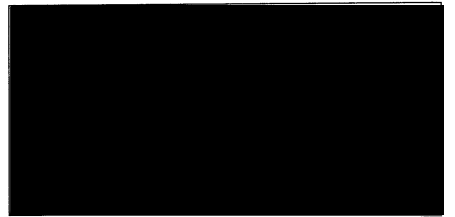
〈あかんべーをかける〉

「あかんべー」が意識化したことを、再確認するために、4コマ漫画を使った。4コマで構成された場面と時間経過の中で、登場人物の感情がぶつかり合う。そこで「あかんべー」を使うことができるかを見届けようとした。

T みんなで一緒にやります。

1コマ目。わかめちゃんとお友だちが2人でおままごとをしていました。

C よしてって言ったの。



T そしたら、わかめちゃんはなんて言ったの?

C だめって言ったの。

T そしたら、長ズボンの男の子はなんて

言ったと思う?

C 入れてよ。

T 次は2コマ目。これはどうしたの?

T としお 助けちゃったの。わかめちゃんを。

T 半ズボンの男の子は、なんて言っただけなの?

C やめて。おどかした。

T 半ズボンの子が長ズボンの子をおどかして、わかめちゃんを助けた。違う考えもあるのかな?

C かった。意地悪したからかった。

T 長ズボンの子をぶったからその子が泣

いちゃったのね。それで、わかめちゃんの友だちが「なによ、かわいそうじゃない」とけた。そうしたら、わかめちゃんはどうしたかな?

C かった。

T 今日は、なんの勉強だったの?

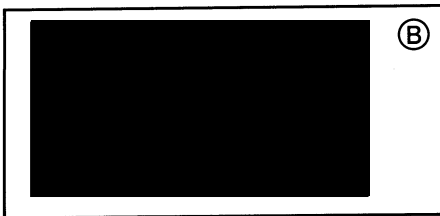
のん あっかんべー。

C わかめが、あっかんべーした。

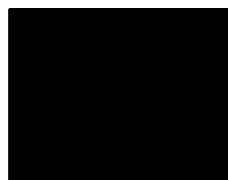
T だれに、あっかんべーしたのかな?

C (前に出て、長ズボンの子を指す。)

T わかめがあっかんべーすると、



◎



C もっと大泣きした。

(B)

T ではこの女の子はどうしたのかな？

C この人もあっかんべー。

T だれに？

C わかめちゃん。

T ここでいい？（わかめと向い合わせにする。）◎

C ちがう、ちがう。

T ここ？（わかめと背中合わせにする。）◎

C わあー。ちがう。

ちがう。

C （わかめと女の子を向かい合わせに戻す。）◎

T ここはだめ？

（わかめとはなして背中合わせにする。）◎

C ひとりであっかんべー。

べー。

T 1人であっかんべーになっちゃう。（わかめと女の子を向かい合わせにする。）

C 反対、反対。

◎



T どうしたらいいの？

C 女の子と、わかめが一緒になって、長ズボンの子にあっかんべーしている。(E)

C はんたい。

T どれがいいかな。◎

C （女子が5人以上手を挙げる）

T たくさんいるね。

T どうしてわかめと女の子があっかんべーになっちゃったのかな？

C この前に、わかめちゃんが長ズボンの子に、あっかんべーしたから、女の子がしかえしでわかめちゃんに、あっかんべーした。

T 半ズボンの男の子はどうしているのかな？

C ないている。大きなき。

T どこにいるの？（Aの配置に4人を置く。）

ちがう。

T 置いてみて。

みほ （男の子2人を向かい合わせにし、わかめと女の子を背中合わせにする。）

かな （わかめと女の子がそれぞれに、長ズ

ボンの男の子に向かって、あっかんべーをしている。(E)

りゆう （泣いている男の子2人を向かい合わせにして、女の子2人は向かい合わせであっかんべーをしている。）

としお （半ズボンの男に向かって、女の子2人があっかんべーをしている。）この子が長ズボンの子に可愛いそうなおことをしたら、こうやって2人で、あっかんべー。

T 今日は、あっかんべーのお勉強でした。あっかんべーは、「ダメ」とか「くやしい」とか、言葉を使わなくても「あっかんべー」で伝わるんだね。暑いのに、いっしょうけんめい勉強してくれてありがとう。これで終わります。

授業開始から1時間近く経過しての活動だったにもかかわらず、子ども達の反応は良かった。さすが山口県の子ども達はねばり強い。座ったまま、あっかんべーをしなかった女の子達も心では参加していたことが、ここで分かった。驚いたのは、場面の状況や、登場人物から発しているであろう声を、言語化しなくても、4コマ目の人物配置（提示した時、4コマ目は白紙だった。）を正しく把握していたことである。絵は隠されていても、しっかりと見えている子どもが何人もいたことには驚いた。

4人の関係を、改めて考え直すそうとすると、混乱してしまうことも分かった。論理的に起承転結を考えて4人の配置を決めるのではなく、1コマごとの関係に反応していたら、わかめと女の子が向かい合ってあかんべーする絵が見えたという感じだった。いつ、だれに教えてもらったか定かではないが、あかんべーはできる。でも、本性が丸出しになってしまふので、人前でやるのはひかえた方が良さかもしれない。など、無意識の奥に閉じ込めていたあかんべーが湧き上がってきたということなのかもしれない。開始から90分が過ぎようというのに「もつとやりたい。」という子ども達に、山本先生が、次回続きをやることを約束して、授業を終えた。

5. あかんべーを失わないように

今回の授業に参加した大学院生の感想である。

「今日授業後の記念撮影で人生初のあかんべーをしました。やったときに、意地悪とか、相手を見下していじめるとか、そういうのとは全然違う、快感というか、自分が開ける感覚を味わいました。」

「ぼくも初あかんべーでした。とても不思議な感覚でした。昨日から、どんな感覚なんだろうと想像しながら、やるのがちょっと怖

くて、恥ずかしさとかもあるのか、何かが自分の中でそれをさせなくて。ところが記念撮影で実際に身を置いてみると、とても心地良くて、その心地良さというのを、共通した感覚として共有していて、その心地良さを発言させる行動伝承『あっかんべー』という、型のようなものが残っていることに感動しました。」

彼らは、子ども時代に「あかんべー」をすることなく大人になったという。感情処理力、言語表現力、共に優れていたからなのか、友達に自分の感情を、「あかんべー」でぶつけることがなかったらしい。そんな彼らが、記念撮影とはいえ、「あかんべー」をした時に、うまく言葉には表せないが、快感だったという。

「授業中、木の陰で『べーっ』ってやっている絵を見て、一番元氣のある感じの男の子が『悪者を倒してやる』って、小さい声で言ったのがすごくおもしろくて、呪術性をこの子感じ取っているのかなって。弱い立場にあっても、収まりきらないエネルギーの方向があるのがうれしかった。それを聞いている周りの子達も『そういうふうと考えていいんだ』って、自分は決してやられたままじゃないぞって。その感覚があることがうれしかった。後ろで座っていた女の子たちも、まだ引いていない。高学年女子は、男子が騒ぎ出す

と、スーッと引いてしまつて「あの子達は子供だから」みたいに言うことが多いから、何か冷たい感じの引きが芽生えそうところで『あかんべー』で共有しちゃうのがいいと思う。私は今日、久しぶりに『あかんべー』をやつて、子どもの頃変身遊びをしてうれしかった感じを思い出して、印象に残りました。」

山本学級の子ども達にとつて「あかんべー」は、まだ伝統芸能化していなかった。コミュニケーションの原点としての感覚を失わないためにも、あかんべーの授業を国語カリキュラムに入れる必要性を感じた。

(八王子市立由井第一小学校教諭)

公開研究授業

平成18年8月23日水曜日

山口県光市上島田小学校

(1年 山本妙子学級)

男子7名 女子14名 計21名

児童の言語生態研究会会員によるティームティーチング

T 授業者 中川

C 児童 (発言が多い児童はひらがなの仮名で示した)